

農業と風景美

——ラグルズ「ピクチャレスク農法」

Agriculture and Landscape in Ruggles' "Picturesque Farming"

今村 隆 男

Takao IMAMURA

(和歌山大学教育学部英語教室)

2013年10月3日受理

18世紀のイギリスを代表する農業家アーサー・ヤングが出していた『農業年鑑(Annals of Agriculture and Other Useful Arts)』に「ピクチャレスク農法(Picturesque Farming)」というタイトルで寄稿していたのが、ヤングの親友であったラグルズ(Thomas Ruggles)である。ラグルズは、1786年6月発行の第6巻から翌年11月の第9巻まで、同じタイトルで4度に渡ってピクチャレスクと農林業の関係について考察する寄稿を行い、ピクチャレスク美と経済性の両立を提言している。本稿では、通常は相反するものであると考えられていたこの両者の調停がどのようにラグルズによって計られているのかを、彼の文章を詳しく検証することによって明らかにしたい。

1) ラグルズは、「便利さや有用性」はピクチャレスク美とは本来は調和しないとしながらも、できるだけ両者の融和の可能性を探ることが重要であるとして、まず第6巻では耕作地(arable fields)を取り上げて有用性とピクチャレスクの接点を見出してゆく。彼は、最も耕作しやすい畑の形は横長の平行四辺形であり、それをピクチャレスクにするためには「平行性(parallelism)」を排除する必要があるとした上で、そのための具体策をいくつか提案する。それは、一言で言えば「適度な不規則を作り出す」という単純な方法であり、例えば材木用の植林によって極端な不規則性を隠したり、耕作地を取り巻く草地の一部を膨らませて規則的な形状を崩したりする、などといった表面的な技術にすぎない(176 - 7)。そして、このような手法を実践する農民を、ラグルズは「ピクチャレスク・ファーマー(picturesque farmer)」と呼んでいる。

しかし、このような小手先の技術の価値よりも彼がこの文章の中で力説しているのは、人工的な耕作地はそのままでもピクチャレスク美の要素を持っているということである。彼によれば、小麦が豊かに実って波打ち輝いている畑の光景は、「画聖」クロード・ロランの描く前景と変わるところがない。また、耕作地の景観に関して重要なのは季節の変化による多様性であり、

そこから「我々の生活の至福」のみならず「最も偉大で最も自然な景観美」が生じる(181 - 2)。つまり、有用性に溢れた自然はそのまま美しく、両者は矛盾しないと言うのである。彼は、「地の霊」ならぬ「土壌の霊(the genius of the soil)」という言葉を使って、耕作地に関しては全て「土壌の霊」に相談すべしと説く。そして、どんな土壌も季節による変転を好むとし、その変化がピクチャレスク美につながるとする。ラグルズは、その代表的な風景を次のように描き出す。

...the eye of taste can tell us that fields of clover, saintfoin, cole-seed, french wheat, beans, pease, and many other varieties from the general clothing of wheat, oats, and barley, diversify, when in blossom, in a most agreeable manner the scene; and here and there the sober tint of a summer fallow contrasts beautifully with the general richness of the whole mass, and form also the variety of colouring in autumn; while turnips, clover, coleworts, and the other green winter food; for live stock, in some measure, break the dreariness of the winter prospect, and relieve the eye from a boundless expanse of dirty soil and extinguished verdure... (Vol. 6 183 - 4)

要するに、これはイギリスの耕作地ではごく当たり前に見られる四季を通しての情景なのであり、めぐりゆく四季の風景は放っておいても美しく、かつ有益なのである。さらにラグルズは、自らのこの主張を補強するために、ミルトン、カウリー、チョーサーといったイギリスを代表する詩人からの引用を付することも忘れてはいない。「土壌の霊」という表現も含めて、ラグルズは伝統的な価値観にも立脚しながら、実用一辺倒ではない風景の見方を呈示しようとしていると言えるだろう。

2) 第7巻でラグルズは、対象を耕作地から生け垣の

樹木に移し、同じテーマで説明を続けるが、彼の主張は基本的には耕作地でも生け垣でも余り変わらない。まず彼は、少しの努力で生け垣の景観をピクチャレスクにするように説く。その方法は、生け垣を増やすことによって耕作地の景観の規則性を和らげることであったり、各々の木を植える際に美観に注意を払うといった一般的なことである。

続いて彼は、生け垣の風景への見方を指導する。つまり、イギリスの田園のあちこちに見られる生け垣を構成しているごく普通の植物——西洋山査子、クラブアップル(野性リンゴ)、柊、ハリエニシダ、野バラ、これらに絡まるスイカズラーの名前を挙げて、いずれも有用でありながらその姿は「ピクチャレスク効果」も併せ持つとするのである。生け垣の植物が長期間に渡って変化してきた場合は、あえて上記のような在来種の植物に植え替えることさえも彼は薦めている。続いて彼は水回りにも言及し、家畜の飲み水のための池を作ることは「楽しい」ことであり、その畔に柳が育てば、「影と美」を同時に造り出すと言う。

ラグルズは、ウォルポールの薦める「ハハ(ha! ha!)」とメイソンの薦める庭の垣根を例に挙げ、いずれも有用性と美観の両方に貢献はするが、農業経営者(farmer)にとっては高価すぎるとする。このことは、ラグルズが有用性を問題にする時、地主である紳士ではなく実際に農業に従事する側、さらに正確に言えば貧しいコテージアールではなく彼らを雇う側の立場に立って判断していることを示していると言えらる。

この一文を通してラグルズは、対象たる風景の中に「利益」、「経済性」、「有用性」、「便利さ」という「理性」で捉えるべきものと、「美」、「ピクチャレスク」、「趣味」、「快適さ」という「感覚」で捉えるべきものとの、相対する2つの要素を見出し、その両立は可能であること、そしてそれは見る者の主観の問題であることを指摘し、農業に関わる者達の意識の改革を促している。ここには、理性から感性・感覚、或は主観や想像力の尊重へという大きな時代の流れが反映されているのを認めることができる。

3) 続く第8巻では、植林一般の問題が、やはり「利益と美」の二つの観点から取り上げられている。ラグルズは植林する場合の木の種類について、自分が特に好みにしているという「松と樅」が中心になり、それに「様々な種類の落葉樹」が混じり合って散在している状態が最も望ましいとする。なぜなら、植林した木々が育って利益をもたらす頃になると、春・夏・秋には針葉樹と広葉樹が融合して見事な緑色をなし、冬には樅の木の常緑の葉が殺風景な大地に彩りを添えるからである。また、次の箇所では植林された木々への時間の作用が強調される。

If, therefore, we are able to look forward with the prophetic eye of taste to the time when the firs have amply repaid the planter's expence, we shall see the deciduous trees lofty towering in the air, and gratifying our descendants with their beauty and magnificence, or repaying our progeny most largely for these delightful exertions of the taste, spirit, and industry of their ancestors. (Vol.8 91)

時間が経過することによって、樅の木は経済的な利益を、そして落葉樹は美と壮麗さを、それぞれ植林者の子孫に対してもたらすがゆえに、針葉樹と落葉樹の組み合わせが推奨されている。植林の木々における有用性と美観の両立は、時間の作用が補強することによって可能となるのである。植林とは本来、人為的なものであるが、時間が経過することによってより自然状態に近くなり、そのことが美観を高めるのである。この部分には、「放っておく」ことによって自然美を最大限に高めることを主張した、プライス(Uvedale Price)やナイト(Richard Payne Knight)といったピクチャレスクの理論家との共通点が認められる。

針葉樹の中で最も有益であると同時に美をもたらししてくれる種類の木として、スコットランド松(Scotch pine)即ちヨーロッパ赤松と、落葉松(larch)の名前が取り上げられる。後者の落葉松は、成長が早いこと、つまり利益が早く得られることと、葉の緑が美しいことを根拠にラグルズは薦めているが、1780年代から盛んに植林されたこの落葉松は、利益を優先する農業推進派と美観を優先するピクチャレスク派やロマン派がその是非をめぐって激しい論争を繰り広げた木である。彼はここで、迷い無く落葉松に有用性のみならず美を見出している。ラグルズは基本的に農林業を推進する立場で、有益で美しい木は在来種・外来種の区別なく積極的に受け容れる姿勢を見せており、プライスやナイトのようにナショナリズムの観点から在来種を優先することはない。

このあと、材木用の林の周囲に柊や月桂樹を植えれば、農場の美観が大いに高められると同時に、材木用林が早く、また真っすぐに育つ、といった有用性と美のバランスに関わる具体的な話題が、様々な種類の木をめぐって続く。そして、このような視点で木を選んで植える植林者を、彼は「ピクチャレスク・プランター(picturesque planter)」と呼ぶ。

4) 最後の第9巻においては、領地内にある農業に関わる建築物が取り上げられている。生け垣や林の木々、或は耕作地の景観とは異なり、農場を中心にした建物に関して「美や趣味は副次的な考察の対象にすぎない」ので、建物の装飾性等といった利益につながらない出費は控えるべきであるとまずラグルズは言う。そして、

この点に関して議論の余地は少ないとしながらも、経済性と矛盾しないという条件のもとで農業施設をピクチャレスクにする方策もあると、次のように続ける。

Use and convenience must, therefore, in this department be allowed to take the lead of taste, or picturesque effect ; but here, even in the farm yard, neatness and propriety in the form, disposition, and fitting up of the various buildings, will catch the observing eye of taste ; and if the whole is surrounded by a plantation ; a turret with a clock and dial (no useless ornament to the industrious) on the loftiest building, and on the summit a vane may display itself, which, to the observant meteorologist, is one of the most certain prognosticators of weather ; the whole suit of buildings thus surrounded, and thus ornamented with its turret bosomed high in towering trees, will captivate the eye with an appearance of a rural village, the residence of honest industry, and its companions health and cheerfulness. (Vol. 9 7)

農場でさえ、建物の「こざれいさ」や「形や配置の適切さ」に配慮し、「様々な建物を付置」すれば、良き「趣味」を持つ人の目に適うと言う。「適切さ」というのは曖昧な言葉である上、これ以上は説明されていないが、それよりもここで注目すべきは、「こざれいさ」が「趣味」に適う要素であるとされていることである。ラグルズは、「ピクチャレスク農法」という一連の文章の中で一貫して、風景美を見極めるのが「趣味」であり、それは有用性への視点とは本来は相容れないという前提で農地の風景を説明している。彼がこの文章を書いた1780年代において、コテージなどの改良を目指していた人々にとって、「こざれいさ」は建築物の実用的な側面に不可欠であって美観や装飾性とは無縁の要素であった。しかし、この引用文においてラグルズは、「こざれいさ」は美に通じるものであると言っているのである。

続けてラグルズが言及しているのは、教会の高い塔などに付けられた時計や日時計、風見鶏である。これらは、勤勉な労働者に時間や天候などを教えると同時に、「役立つことはない装飾」ともなると言う。これらの装飾を美観と有用性の両方を兼ね備えたものとして解釈する彼の視点は、風景詩『アムウェル』(1776)の中でスコットが、「絶え間なく過ぎ行く時間の経過を伝えることを忘れた日時計」、つまり本来の目的のために使用できない装飾だけのものを、建物の象徴的なピクチャレスク的要素の例として挙げていたことと対照的である。そしてラグルズは、以上の条件が整えば、建物群全体は「正直」で「勤勉」、また「健康」で「陽

気」な労働者の住まう幸せな「田園の村」に見える、とする。

さらにラグルズの「ピクチャレスク効果」の対象は、家畜や農機具にも拡大する。まず家畜は、「造られた目的に答えるように最も計算された形態が美しい」とされ、続けて農機具についても、家畜と同じ趣旨で次のように説明される。

Utensils of husbandry cannot be said in their outward form and appearance, to possess any intrinsic or real degree of beauty. It is but of little consequence to their effect on the eye, whether a farmer's carts and ploughs are of this, or that, construction, all idea of beauty attending them has respect to their use ; that utensil which is most handy for the particular purpose for which it was constructed, is the most beautiful ; but a general neatness in the preservation of them will distinguish the farming implements of a man of taste, from those of his more careless or less attentive neighbour ; paint will have this effect, and will add a uniformity to their general appearance, as well as a neatness and propriety to that of each particular implement, and the expence will not only please the eye, but will tend to purposes of lightness and preservation. . . . (Vol. 9 10)

農機具も日常的に「こざれい」にしておく手入れを怠らないことが、所有者の「趣味」のよさの証明となる。そして、費用を惜しまずに農機具に塗装をしたりすることで、「こざれいさや適切さ」のみならず「統一性」が得られると言う。ここでも、「こざれいさ」は「趣味」のよさに結びついているのである。また、「造られた目的自体にとって非常に扱いやすい」農機具が最も美しいという指摘は、家畜に対する見方と同様である。家畜も農機具も、その本来の目的に無駄なく適うように神や人によって「適切に」造られている場合、ピクチャレスクであるとラグルズは言うのである。

5) ラグルズの「ピクチャレスク農法」と比較したいのは、『農業年鑑』の同じ1786年の早い時期に出た第5巻に掲載されたプライスの「間伐の悪影響について (On the bad Effects of Stripping and Cropping Trees)」という一文である。そこでプライスは、領主から農地を借りた農業家が植林の木々の枝を切りすぎて成長に悪影響を及ぼしていることを、有用性と美観の観点から批判している。彼は「美と利益」の両立を説きつつ、次のように書いている。

By means of this practice, the profit of the trees on

each farm is, in a manner, transferred from the landlord to the tenant, and, besides the loss of the intrinsic worth of the trees, the appearance itself has a strong influence on the real value of an estate; a number of healthy growing timber trees must be a great inducement to any purchaser, whether considered in the light of beauty, or profit; and the mean, and wretched look of a number of mangled trees that never can become timber, must be as great a discouragement. (Vol. 5 244)

枝を切りすぎるといふ行為によって美観が損なわれ、それが木々の購買意欲を減じさせることで森全体の価値が下がる。ここでは、美と有用性は相互に影響しあう補完的な関係にある。農地は本来ピクチャレスクで美しいというのがラグルズの主張であるが、ここでプライスが言っていることも基本的にはそれと同じである。ラグルスがプライスのこの文章から影響を受けた可能性は十分に考えられる。

ラグルズが、農地を実益の場としてだけでなく美観の対象としても見つめようとしているのは、「我々(即ち、ラグルズら支配層)のために働いてくれる農林業労働者」にとっての労働環境の改善の一環であるというのが一つの理由だろう。農林業労働者は「社会にとってなくてはならない仕事」をしてくれるだけでなく、彼らは「持って生まれた美点」を有しており、「工場労働者や芸術家、あるいは国家の高位の人々」よりも「優れた実践的哲学者」であり「秩序の統制に従順」であると言う(Vol. 9 12 - 3)。ここにも、18世紀後半に特有の理想化された労働者像——旧来の階級社会の枠組みの中で、下から国家を支えるという意味で貴重な人々——が見出せる。そして、労働者が社会的に重要であるのみならず、彼らの待遇は彼らを使役する支配層の責任でもあり、それゆえにその生活・労働環境は視覚的にも不快であってはならない。ラグルズは、労働の場とは本来ピクチャレスクであるはずで、視点を変えることによってそれを見出す目を備える必要があると訴えている。つまり、彼が強調するのは、実際の労働の場の環境を改善するよりも、その環境に対する評価の基準の変更であると言ってもよいだろう。

しかし、本来は法律が専門で農業に関しては素人だったラグルズの提案は理念が先行している感が否めず、どれだけ読者に説得力のあるものだったかは不明である。第7巻の最後のところで彼は、ピクチャレスクと有用性の両立という提案は後者の分が悪い、即ちピクチャレスクであることを前提にすれば利益に繋がりにくいということを確認しており、両者の好ましい「バランス」は見る側が健康で機嫌の良い時に精神を落ち着かせてようやく感じとれるものであるとしている

(Vol. 7 28)。「ピクチャレスク農法」の約5年後の1792-3年になってラグルズが出版した『貧困の歴史(The History of the Poor, their Rights, Duties, and Laws Respecting Them. In a Series of Letters)』では、貧困の原因を飲酒などを含めた当事者の怠惰であると結論づけている(2 182)。彼の労働者観が根本的に変わっていないとすれば、「ピクチャレスク農法」における貧困層の理想化は、時代の要求する国家観に沿うようにいくぶん修正されたものであったと考えた方がよいのではないかと思われる。

ピクチャレスクは有用性やモラルとは基本的には無関係であるとギルピンが旅行記の中で宣言したことはよく知られているが、一方でその旅行記が出版されていた同じ1780年代にラグルズが有用性とピクチャレスク美の融合を目指したことの意義は大きいであろう。これはピクチャレスク美とは何かを考えさせ、流行の初期の形式的な風景観からピクチャレスク美学が脱皮してゆく契機の一つになったと考えられる。彼の提案は、装飾用コテージの建設のように人為的に自然風の景観を造り上げようというのではなく、田園に住まう労働者達のありのままの日常的な生活環境は、そのままでもピクチャレスクだと見ることができるということである。

そして、その際に彼がこだわったのは、耕作地や生け垣の風景も農機具もそして家畜でさえもが、それ「本来」の目的に合うように「適切」に作られているかどうか、ということである。そして、「本来」の目的に合うとは、或いは「適切」であるとは一体どういうことなのかを的確に説明することが難しい中で、ラグルズがこだわったのが「こぎれいさ」である。即ち、彼にとって「こぎれい」であることは、有用でもあり、またピクチャレスクでもあったのだ。1790年代にはスミス(J. T. Smith)がコテージを「こぎれいな」ものと「放っておかれた」ものに二分し、後者こそピクチャレスクだとしたが、ラグルズの主張はそれと真向から相対立するものであった。ピクチャレスクとはワーズワスが『序曲』の中で批判したように必ずしも表層的、一面的なものではなく、上述のような議論が時代の風景観を押し進めていったのである。そして、特に風景観は見る側の主観の問題でもあるというラグルズの考え方は、ナイトやさらにはロマン派に繋がって行ったと考えられる。

Works Cited

- Ruggles, Thomas. "Picturesque Farming." *Annals of Agriculture and Other Useful Arts*. Vol. 6.7.8.9. London, 1786-7.
- Smith, John Thomas. *Remarks on Rural Scenery with Twenty Etchings of Cottages, from Nature: and Some Observations and Precepts relative to the Picturesque*. London, 1797.